

## [成果情報名]ビワ品種「なつたより」の寒害被害枝切返しによる次年度産開花時期の前進化抑制

[要約]長崎県で育成したビワ品種「なつたより」では、冬期の寒波により幼果が死滅した結果枝先端を4月中に切返すことで、十分な着房が確保され、次年度産開花時期の前進化が抑制できることから、寒波による幼果の死滅が軽減できる。

[キーワード]ビワ、なつたより、寒害、切返し、着房

[担当]長崎県農林技術開発センター・果樹・茶研究部門・ビワ落葉果樹研究室

[代表連絡先]電話 0957-55-8740

[分類]研究成果情報

### [背景・ねらい]

ビワ品種「なつたより」は、果実が大きく食感の良い長崎県で育成した品種である。本品種では2016年1月24日の寒波により深刻な寒害を受けた。被害樹では新梢の発生が早く進み、次年産の出蕾、開花時期が前進化することにより、生育の進んだ幼果が再び寒害を受けることが想定されるため、被害枝の新梢発生時期を遅らせることを目的に、被害枝の先端を切り返すことで再度、新梢の発生を促し、果実生産に影響の無い出蕾、着房、開花に誘導できないか検討を行う。

### [成果の内容・特徴]

1. 結果枝の切返し処理による着房は処理時期が4月末(4/26)までなら、無処理と同様にほぼ全ての枝に着房が認められる(表1)。
2. 11月2日時点における花房進捗は無処理で最も早く、切返し処理を行った場合は、処理時期が遅くなるにつれて花房進捗も遅くなる傾向を示す(表1、写真1)。
3. 12月23日時点における開花率は、無処理が90%以上と最も高く、開花が進んでいるが、切返し処理を行った枝では開花率が低く、開花時期は無処理に比べ遅い(表1)。
4. 幼果の凍死果率は無処理で約50%であったのに対し、切返し処理を行った場合は20%以下である(表1)。
5. 5月16日での切返し処理では、着房率が約66%、6月5日の処理では55%である(表1)。

### [成果の活用面・留意点]

1. 本処理は収穫が見込めない深刻な寒害被害樹に対して有効である。
2. 枝の切返しは枝先端部のみとした。なお、切返し処理時に枝先および葉跡より発芽が認められる場合は、発芽していない部位まで戻り切返しを行った(写真2)。切返し処理後は通常の栽培管理を行った。

[具体的データ]



写真1 ビワ花房の花房進度



写真2 新梢先端の切返し方法

- ①枝先端より発生している新梢を切り取る
- ②新梢の発生が僅かでも切り取る

表1 ビワ「なつたより」寒害被害枝の切返し時期と発生した新梢および幼果の生育状況 (2016)

切返し時期	着房率 <sup>z</sup> (%)	花房進度 <sup>y</sup>	開花率 <sup>x</sup> (%)	幼果径 <sup>w</sup> (mm)	凍死果率 <sup>v</sup> (%)	枝長 (mm)	葉数 (枚)
無処理	100.0	3.7	90.7	10.7 a <sup>u</sup>	48.2	13.1 c	17.0 a
4月 6日	98.7	2.8	77.0	9.0 b	16.7	14.0 b	15.7 b
4月 26日	99.0	2.5	72.3	8.7 b	14.3	15.5 ab	16.5 ab
5月 16日	65.9	1.6	47.1	8.1 bc	15.5	16.1 a	15.7 b
6月 5日	55.0	1.3	38.8	7.9 c	13.0	13.7 bc	14.9 c

u 縦の異なる文字間には、Tukeyの多重検定により5%の有意差有り

v 2017年2月21日調査、各処理40果程度を実施

w 2017年2月21日調査、各処理40果程度を実施

x 2016年12月23日調査、1果房内における開花割合の平均

y 2016年11月2日調査、花房進度1:出蕾始期、2:穂軸分化期、3:穂軸分化期、4:摘蕾適期

z 2016年11月2日調査、各処理100枝程度を実施

※調査樹は7年生「なつたより」4樹を使用、1樹内に異なる処理区を設け調査

(松浦 正)

[その他]

課題名：ビワ「なつたより」の高品質果実安定生産技術と成熟予測システムの開発

予算区分：県単

研究期間：2014～2016年度

研究担当者：松浦正

発表論文等：